「運動ぎらい」の生成機序に関する事例研究

波 多 野 義 郎（東京学芸大学教育学部保健体育学科）

中 村 精 男（財団法人日本体育協会事務局）

（昭和55年12月8日 受付）

Case Studies on the Formation of Unfavorable Attitude against Physical Activities

Yoshiro Hatano¹

Morio Nakamura²

Abstract

In order to investigate the processes of unfavorable attitude formation against physical activities among young people, twenty-four male and female students who, out of a sample of 613 college students, indicated such a negative attitude in a questionnaire survey were interviewed. Each interview, average time length being 50 minutes, constituted a case study. The interview revealed various contributing factors, in terms of cause-result relationship, in forming unfavorable attitude against physical activities. General tendencies among the extracted backgrounds why they had come to form such unfavorable attitude may be summarized as follows:

1. Strong inferiority complex due to uncoordination and the lack of efficient sports skills prevailed.
2. Being afraid of possible failures resulting from quiet and passive personality was often a fertile bed in promoting negative attitude against physical activities.
3. Distrustful experiences in the previously involved school physical education programs, especially complaints against neglect of individual differences by the physical educators, were frequently pointed out.
4. Rigid philosophy of the physical education teachers that only faster, higher and stronger performances deserve for favorable evaluation invited strong criticism.
5. Few among interviewed had ever experienced happiness of own physical movement.

Although individual right and freedom should be highly respected, negative environment against the promotion of physical education and sports among young people, such as contributing elements to produce those who unfavor physical activities must be removed from homes and schools.

(Yoshiro Hatano and Morio Nakamura, "Case studies on the formation of unfavorable attitude against physical activities", *Jap. J. Phys. Educ.*, 26—3: 177—87, December, 1981)

1 Tokyo Gakugei University, Department of Health and Physical Education, Nukui-kitamachi 4-1-1, Koganei City, Tokyo (184)

2 Japan Amateur Sports Association, 1-1-1 Jinnan, Shibuya-ku, Tokyo (150)

緒 言

スポーツに関する世論調査などの結果が指摘するところによれば、日本人におけるスポーツ愛好度は年々増大する傾向にあり、スポーツ実施者も大幅に増大しているという^{50),73)}。これに伴い、大学生・社会人の日常的スポーツ活動実施を規定する要因に関する研究報告も、近年増加してきた^{5),6),14),26),28),30),32),33),43),51),52),53),54),62),63),86),93)}。

これらの研究報告では、大別して社会的環境変数とパーソナリティ変数の2つの視点²²⁾からの分析を試みているといえるが、とりわけスポーツへの愛好的態度がスポーツ実施行動と深くかかわっているという指摘は多く見うけられる^{6),17),19),26),28),33),44),51),54),86),87),88),89)}。もっとも特定の対象に対する態度が直接的に行動に表現されるとは限らず²³⁾、態度と行動との間にはある種の非一貫性があることがしばしば示唆されている^{3),80)}。

言いかえると、態度は行動を引き起こす諸要因の中の一つにしかすぎず、従って他の要因の影響を無視することはできない⁸⁰⁾。この意味から、態度と行動間の完全な因果関連を決定することは不可能ですらある。あるいは、特定の対象に対する行動は、特定の対象に対する態度と状況との関連によって異なった現われ方をするものであると言ってもよい。とは言え、スポーツ実施行動を引き起こす諸要因の中で、スポーツへの愛好的態度がその大きな要因であるとの仮説は、前述した研究成果の蓄積からして、一応うなずけるところであろう。

一方、学校体育の立場からみると、卒業後のスポーツ行動と学校体育との間にはある種の関連がみられる^{57),58),59)}。例えば、授業への積極的参加および体育実技の愛好的態度が卒業後におけるスポーツへの愛好的態度と関係し、また、それを媒介要因としてスポーツ実施行動が促進される⁵⁸⁾との指摘がある。

また、改訂された文部省学習指導要領^{48),49)}をはじめ、阿部^{1),2)}、園⁹⁾、橋本¹⁷⁾、堀田²¹⁾、嘉戸²⁷⁾、前川⁴⁰⁾、竹之下^{84),85)} および宇土^{91),92)}も、このような視点に基いて、生涯体育の立場から学校体育の位置づけとその役割を指摘し、学校体育では運

動の楽しさを経験させ、運動に対する興味を喚起させることが重要であるとしている。

しかしながら、体育・スポーツに対して好意的態度を持つことができないような、いわゆる「運動ぎらい」の成人や青少年（以下「運動ぎらい」と記す）が、ある一定の比率をもって存在していることは、これまで多数の研究報告^{11),17),20),35),64),65),68),71),74),83)}によって指摘されている。さらに「運動ぎらい」の生成については、単に本人自身にかかわる要因のみでなく、広く日本の文化・社会・教育のあり方がかかわっており⁶⁸⁾、「運動ぎらい」は、いわばわが国の体育における多くの問題を背負った、象徴的な姿²⁹⁾として出現しているとの指摘もみられる。

このように、スポーツへの愛好的態度がスポーツ実施行動そのものと深いかかわり合いを持ち、それ故に学校体育におけるスポーツへの愛好的態度形成が求められている。このような状況下で、スポーツへの愛好的態度形成を促進する要因と、それを阻害する要因とを明らかにするためにも、「運動ぎらい」の生成機序についてこれを解明しようとする試みは、それなりの意味を持つものと思われる。

「運動ぎらい」の特徴およびその要因に関する研究としては、浅田⁷⁾、調枝⁸⁾、江川¹⁰⁾、石橋ら^{24),25)}、小林³⁶⁾、松田⁴²⁾、仲田ら⁵⁶⁾、丹羽⁶¹⁾、佐久本ら^{66),67),68),69),70),71),72)}、末利⁷⁶⁾、鈴木⁷⁸⁾および高森ら^{81),82)}の報告がある。しかし、「運動ぎらい」の生成機序を因果関連的に把握することを試みた研究は必ずしも豊富ではない。

そこで本研究では、体育・スポーツに対する意識などに関する質問紙調査において、「運動ぎらい」であると自己評価した者を抽出・追跡し、それぞれにおける生育歴との関連を中心とした、個別面接調査を実施することによって、「運動ぎらい」の生成機序を因果関連的に把握することを目的とした。

なお、「運動ぎらい」の概念規定は難かしく⁷¹⁾、過去の研究報告においても「運動ぎらい」「体育ぎらい」など用語の使用は一様ではない。しかし「運動好きの体育嫌い」⁹¹⁾の存在も指摘されていることから、本研究の範囲内で用語を限定するこ

とは必要であろうと思われる。そこで本研究では、「運動ぎらい」とは、みずからスポーツ活動や身体運動を行なうことに対して否定的態度を有する個人の総称であると限定する。また、ここでいうスポーツとは、運動競技をはじめ、楽しみや健康・体力づくりなどを目的として自発的に行なう身体活動全般⁵⁰⁾を含めるものとする。

方 法

複雑な要因が内在している社会的・人間的現象を、因果関連的に把握することは至難である。体育・スポーツの分野で統計的手法を用いて因果関連を明らかにすることを試みた研究として次のような報告がある。すなわち、数量化理論を用いた江刺¹²⁾の報告、パス解析を用いた Kenyon³⁴⁾、桑野³⁸⁾、および Spreitzer and Snyder⁷⁵⁾ の報告、さらに重回帰分析を用いた小椋・影山³⁷⁾らの報告である。また、石橋²⁵⁾、佐久本⁷¹⁾は「運動ぎらい」にさせた要因を因子分析法によって明らかにすることを試みている。

一方、「運動ぎらい」の発生メカニズムを因果関連的に把握する方法として、事例研究の手法が有効であるとの指摘がある^{16), 77)}。そのような実例として、作文・感想文をもとにして分析を行なった、浅田⁷⁾、浜田¹⁵⁾、佐久本⁷¹⁾、末利⁷⁶⁾、高田⁷⁹⁾、および高森⁸¹⁾の研究報告をあげることができる。

事例研究とは、多面的・包括的・集中的な分析を加えることによって個人を総合的に把握しようとする営み^{18), 31)}であり、解釈に客観性を欠くという弱点を有しているとはいうものの^{13), 45)}、因果関連の解明にはある程度容認され得る方法とされている^{16), 77)}。しかも、因子分析法、数量化理論、重回帰分析、パス解析などの統計的手法が必ずしも完全とは言いがたい状況にある^{3), 4), 94), 95)}ことからして、社会的・人間的現象における因果関連の把握に際して、事例研究の有効性は認められるであろう。そこで本研究では、個別面接法^{60), 90)}を採用して被面接者に関する情報を収集し、それに基づいて「運動ぎらい」の生成機序を因果関連的に把握するよう試みた。個別面接では被面接者に起る反応を見ながら柔軟に対処できるという点⁶⁰⁾

で、質問紙調査、作文分析に比べて情報収集上有利であるという長所がある。

東京都内にある国・私立大学1年生613名(男子290名、女子323名)を対象にして、1979年6月に質問紙調査を実施し、その中で「運動ぎらい」とであると自己評価する者、男子10名、女子14名、計24名を抽出した。質問紙の文末に、回答者の学生番号を任意記入する仕組みを設け、追跡が必要と判定された該当者に、研究目的などを提示してその協力を呼びかけた。その結果、個別面接調査を依頼したすべて(100%)の者がこれに自主的に協力を申し出た。被面接者24名については、面接時に警戒心をおこさせないよう特に配慮した。したがって、面接者・被面接者間のラポールは良好であったと思われる。

面接は1979年12月から1980年1月にかけて実施した。一面接時間は30分間から90分間にわたり、平均50分間であった。記録にはテープレコーダーを用いたが、その使用に同意が得られない場合には筆記によった。また、面接調査の場合、面接者の期待効果^{45), 90)}によって歪みが生じると言われているので、特にその点についても注意した。

面接には、基礎項目のほかに過去の研究報告^{7), 8), 10), 24), 25), 36), 42), 56), 61), 66), 67), 68), 70), 71), 72), 76), 78), 82)}を参考にして作成された5領域からなる分析の視点を用意し(表1)、被面接者との自由な会話の中から、「運動ぎらい」の生成機序を理解するよう努めた。

結 果 と 考 察

全24事例の中から、分析例として6事例を取り上げて表2に示す。

表2では、「運動ぎらい」の生成に影響をおよぼしたと考えられる要因には○印を、特に強い影響をおよぼしたと考えられる要因には◎印を付した。例えば事例1では、運動ぎらいに対して本人自身の性格的側面、能力的側面、態度的側面において特に強い影響をおよぼすものがあったことが理解できる。さらに体育授業の要因においては、授業内容に関する要因が、また成績評価の要因においても強い影響力をおよぼすものがあったことが読みとれる。

表1 「運動ぎらい」の生成機序に関する分析の視点

基 礎 項 目	課外運動実施状況, 非実施理由 (主体的条件, 客体的条件), 運動クラブ所属経験 (学内外問わず, 幼児期—現在), 運動に対する好嫌度 (幼児期—現在), その他 (出身地, 通学形態, 通学時間, 興味など)
家 庭 的 要 因 (主に幼児期)	幼児期の運動経験, 親子関係 (親の養育態度, 期待, 過保護, 遊びなど), 遊びの種類, 周囲の人びとの運動への関心, 兄弟関係 (一人っ子など), 住居・地域環境 (遊び場の有無など)
本人自身の要因	1) 性格的側面……消極的, 神経質, 臆病, 内気, 小心, 不安感, 劣等感など 2) 健康的側面……病弱, 身体的欠陥, ひ弱, 肥満体など 3) 能力的側面……体力, 運動能力, 走力, 運動での不器用さなど 4) 態度的側面……くわずぎらい, 運動に対する価値観・興味, 恐怖心, しゅう恥心, 失敗感など 5) 情緒的側面……運動での楽しさ経験, 外傷体験 (大けが, でき水, 運動恐怖など)
体育授業の要因	1) 授業のふん囲気…教師・仲間との関係 (態度, 言葉, 協調性など) 2) 運 動 種 目……種目に対する好嫌, 年間計画, 時間数, 要求される技術の難易度, 選択の有無など 3) 施設・用具……必要量を満たしていたかなど 4) グループ分け, 役割分担…グループ編成法 (等質・異質集団) など 5) 授 業 内 容……強調点 (技術・体力・運動の楽しさなど), 授業の進め方など 6) 授業への態度……好嫌度および理由
教 師 の 要 因	1) 性 格……ユーモア, 信頼感, 親しみやすさなど 2) 指導理念・指導法…具体的目標, 個人差の考慮, 競争重視, 指導能力など 3) 態 度……熱意, 理解, 不親切, ひいき, 酷評, あざけり, 激励の有無, 暴力など
成績評価の要因	1) 評価の視点……能力評価, 努力・伸びの考慮など 2) 比較に対する不満の有無など 3) 劣等感の形成など
体育授業と現在の運動への態度との関係	運動に対する考え方に与えた体育授業経験の影響など

※各要因には相互に関連するものが含まれている。

具体的に述べると, 事例1の対象者は, 生育歴を通して, 消極的な性格で他人の目を気にするところがあり, 失敗したら恥ずかしいという意識が強いとの回答を得た。また能力的側面では, 常に体力的に他人より劣っていて不器用であり, 特にバレーボール, バスケットボールなどの球技における技術には全く自信がないとの自己評価を得た。以上のことを受けて態度的側面では, 失敗しないだろうかという意識が強いために, 運動に対していわゆる「食わずぎらい」になる傾向があると述べている。本人自身にそのような要因がある中で, 過去における体育授業の場 (特に中学) では, 技術の差を他人と比較されることによって常に上手な人に対してひけ目を感じ, 劣等感だけが

増幅されていったという回答を得た。このように事例1では, 性格的, 能力的な要因によってもたらされた運動に対する「食わずぎらい」の態度が体育授業経験の中でさらに増幅されていった様子が明らかになった。

次に事例7を取り上げることにする。この場合には, 能力的側面, 態度的側面, 教師の要因, 成績評価の要因に強い影響をおよぼすものがあつたことが読みとれる。即ち本人は幼少時より現在に至るまで体力的に劣り, しかも不器用であるので, 失敗したら恥ずかしいという理由で運動に対して「食わずぎらい」を起こしていることが指摘された。それにもかかわらず, 中学の体育教師は競争を重視し, 強い者・上手な者を中心にした指

表2 「運動ぎらい」の生成機序に関する分析例

	事 例	No.1 (男)	No.2 (女)	No.7 (男)	No.13 (女)	No.14 (女)	No.18 (女)
基 礎 項 目	課外運動実施状況	非実施	非実施	非実施	非実施	非実施	非実施
	主な非実施理由	仲間, 場所	否定的態度, 能力的問題	否定的態度, 場所	時間	時間, 施設	他に興味, 時間
	運動クラブ所属経験	卓球(中学)	テニス(中学)	テニス(中学)	水泳(小学)	バドミントン(小学)	
家庭的要因 (主に幼児期)	運動経験		◎				○
	親子関係						
	周囲の人びとの運動への関心						○
	住居・地域環境				○		
本人自身の要因	性格的側面	◎	◎	○	◎	◎	○
	健康的側面		◎				○
	能力的側面	◎	◎	◎	○	◎	○
	態度的側面	◎	◎	◎	◎	◎	◎
	情緒的側面		◎				
体育授業の要因	授業のふん囲気			◎			
	運動種目	○			○	○	○
	施設・用具	○			○		
	グループ分け 役割分担					◎	
	授業内容	◎				◎	
	授業への態度	きらい 楽しくない	きらい 楽しくない	きらい	楽しくない	不満	きらい
教師の要因	性 格			◎		○	◎
	指導理念・指導法			◎	○	◎	◎
	態 度			◎			
成績評価の要因	評価の視点	◎		◎	◎	◎	○
	比較に対する不満	◎		◎		◎	○
	劣等感	◎	○	◎		◎	
体育授業と現在の運動への態度との関係		他人と比較され, 上手な人に対してひけ目を感じた。	ぜんそくで体が弱く人並みにできず自己嫌悪に陥る。	教師によって下手な者はダメだという意識を植えつけられた。	技術的にひけめを感じ下手な者はダメだと思った。	個人差を考慮してくれなかった。上手な人ばかりが楽しそう。	下手な子をほったらかしにする教師に不満あり。

○……「運動ぎらい」の生成に影響をおよぼしたと考えられる要因

◎……「運動ぎらい」の生成に特に影響をおよぼしたと考えられる要因

空欄…「運動ぎらい」の生成に特に関係が認められない要因

表3 「運動ぎらい」生成要因の出現数および出現率

		◎	○	◎+○ (全24事例中の出現率%)
家庭的要因 (主に幼児期)	運動経験	2 事例	5 事例	7 事例 (29.2%)
	親子関係	0	1	1 (4.2%)
	周囲の人びとの運動への関心	2	3	5 (20.8%)
	住居・地域環境	0	1	1 (4.2%)
本人自身の要因	性格的側面	12	7	19 (79.2%) ※
	健康的側面	3	4	7 (29.2%)
	能力的側面	18	3	21 (87.5%) ※
	態度的側面	16	2	18 (75.0%) ※
	情緒的側面	3	0	3 (12.5%)
体育授業の要因	授業のふん囲気	3	0	3 (12.5%)
	運動種目	6	13	19 (79.2%) ※
	施設・用具	1	2	3 (12.5%)
	グループینگ	1	0	1 (4.2%)
	授業内容	5	1	6 (25.0%)
教師の要因	性 格	6	2	8 (33.3%)
	指導理念・指導法	6	3	9 (37.5%)
	態 度	4	0	4 (16.7%)
成績評価の要因	評価の視点	8	6	14 (58.3%) ※
	比較に不満	7	3	10 (41.7%)
	劣 等 感	4	1	5 (20.8%)

○……影響をおよぼしたと考えられるもの

◎……特に強い影響をおよぼしたと考えられるもの

※……出現率の高い要因

導を繰返したために、下手な者は駄目だという雰囲気のある授業になってしまったと述べ、中学の体育教師の指導理念に対して強い不満を示した。このように事例7では、体育教師のパーソナリティや指導理念、態度などが「運動ぎらい」の生成あるいは、その増幅に大きな影響を与えたことが指摘された。

他の事例にも見られるように、「運動ぎらい」の発生メカニズムは、個人の生育歴の中で様々な要因が複雑に絡み合っており、極めて個性的であり、一人一人異なったメカニズムを作り上げていることが確認された。従って、今回の調査にみる限り、

発生メカニズムを一般化して示すことは困難ですらあった。

しかし、今回の調査範囲内では、「運動ぎらい」の一般的特徴、ならびに発生メカニズムの共通項とも言えるものとして、次のような結果が得られた。

(1) 「運動ぎらい」は、運動能力に関しては、ほとんど例外なく一貫して劣等感を持っている。特に、器用・不器用という面では、被面接者の大部分の者が幼少時から現在に至るまで不器用であると自己評価しており、それは劣等感にまで高められていると思われる。これは調枝⁸⁾、江川¹⁰⁾、

仲田ら⁵⁶⁾, 佐久本ら⁷¹⁾, 末利⁷⁶⁾による指摘でも明らかである。この「運動能力の低位あるいは技能の拙劣さに対する劣等感」は、まず大きな要因として考えられなければならないであろう。

(2) 性格的には内向的・消極的であると回答する者が多く、一般的に劣等感を抱きやすい性格傾向にあることが考えられる。この点については、仲田ら⁵⁶⁾, 佐久本ら⁷¹⁾によるY-G性格検査においても、「運動ぎらい」群には、内向的な者が多いとの報告がある。今回調査した被面接者においては、特に失敗することを恥ずかしく感じ、他人の目を気にして、運動に対する「食わずぎらい」をおこす者が多いという傾向を把握することができた。これは末利⁷⁶⁾の指摘にもみられるように、器械運動のように演技の成否がはっきり目に見える種目に対して、特にきわだった拒否反応を示す点にみられるものである。

(3) 経験してきた体育授業に対して否定的な評価を下しており、特に授業内容が技術中心であり、しかも個人差を考慮してくれなかった点に不満を持っているという結果が認められた。個人差への配慮が不足していたとの指摘^{61), 82)}は多く見られるが、動機づけ⁴⁷⁾の観点からの考察も必要と思われる。また、教師の好きな種目ばかりを実施することに対する不満を述べる者も見うけられた。

(4) 体育教師（特に中学）の持つ指導理念に対して、強い不満を持つ者が多いことが明らかになった。特に「運動ぎらい」の一般的特徴と思われる「運動能力の低位に対する劣等感」に対する配慮が足りず、逆に、上手でなければ駄目であるという意識に支配されたとして、強い不満を感じている者が多いとの結果を得た。浅田⁷⁾, 高森⁸¹⁾は「運動ぎらい」にさせる原因の大半が教師の指導法に関するものであると指摘しているが、教師の指導理念や生徒に対応する態度は重要な要因であると考えられる。また、石橋ら²⁴⁾, 佐久本ら⁷¹⁾は「運動ぎらい」と体育教師間の情緒的・精神的交流の不足を指摘しているが、「運動ぎらい」に対する教師

の配慮不足を示すものと思われる。

(5) 評価の視点が上手・下手による能力評価となっていることに対して懐疑的・否定的であり、努力を認めてもらえないことに対する不満が多いとの結果であった。栗本ら³⁹⁾, 中雄ら⁵⁵⁾および横田⁹⁶⁾による実験的研究では、指導者が行なう承認・否認の評価が被評価者の意識に対して変化をおよぼすことをそれぞれ指摘しているが、体育授業場面における, significant others (重要な他者)としての体育教師の評価観が与える影響力は大きいと思われる⁸¹⁾。

(6) 過去に経験した体育授業をはじめ、面接調査実施時点までに、運動する楽しさを経験した者は少なく、運動場面での喜び経験の欠如⁷²⁾が一般的に見うけられた。

なお、表3には全24事例における各要因の出現数および出現率を掲げた。

次に、今回の面接調査から認められた「運動ぎらい」の一般的特徴ならびにその発生メカニズムの共通項部分を因果関連的に把握する試みとして、見田⁴⁶⁾によって示された事例モンタージュ法を用いて、「運動ぎらい」の発生メカニズムの要因関連図を作成した(図1, 2)。

事例モンタージュ法とは、各々の事例において見出だされた要因の関連を次々に組み入れながら、現実におこりうる因果関連のモンタージュを拡大していく方法である。図1は、そのような事例モンタージュの作成手続きを示したものである。ここで、事例1において要因Aが結果Bをもたらしたことを示している。同様に事例2では要因Bが結果Cを、事例3では要因Bが結果Dをもたらしたことをそれぞれ示している。この3事例

図1 事例モンタージュ法

図2 「運動ぎらい」の生成機序(事例モンタージュ法による)

において見出された因果関連をまとめると、要因Aが結果Bをもたらし、さらにそれが要因となって結果Cおよび結果Dをもたらしたことが理解できるであろう。このようにこれらのモンタージュを増加させていくことによって、各因果についての相互関連の様子が明らかになり、どのような条件下で、どの要因が、どのような結果を生み出すかという予測が多少なりとも可能となるのである。

従来、事例研究における結果の処理法としては、調査結果を詳細に文章化することが一般的であったと言える。しかし、事例研究は元来、問題の状況を総合的に把握することが目的であり、そこに特徴が認められるものである。したがって、調査から得られた諸要因の内部関連の様子を図表化することは、問題状況を総合的に把握するためには好ましいことと言えよう。また、各事例から得られる個別的データを全体的な構造の中に位置づけることによって、問題の背後にある普遍性を追求するという意味においても、事例モンタージュ法は有効であると思われる。したがって、この方法は「運動ぎらい」の発生メカニズムを理解する際

にも有効な方法であると思われる。

この事例モンタージュ法を用いて今回の調査結果をまとめたものが図2である。図2から、まず本人自身にかかわる要因としての「運動能力の低位に対する劣等感」と、性格的な問題から由来する失敗に対する不安感、それによってひきおこされる「運動に対する食わずぎらい」の傾向が指摘できる。さらにこのような傾向は、体育教師の技術中心主義的指導理念が強く反映される体育授業場面において増幅され、失敗経験を重ねたりみじ

めさを味わったりするうちに、運動場面での喜び経験の欠如をもたらし、そこに「運動ぎらい」を発生させるという関連が読みとれるように思われる。

事例研究の性格上^{13),45)}、また24事例という少数例であることから、今回作成した関連図を一般化することは容易ではなく、ここに示された矢印では説明できないような複雑な関連も存在するであろう。また、一連の発生メカニズムの中で、各要因の及ぼす影響の強さは決して一様ではなく、結局のところ本人自身の性格や置かれた環境などによって著しく異なることが推測される。

結 語

今回の面接調査から与えられた結果に限定して言えば、「運動ぎらい」の発生メカニズムの中で、「運動能力の低位に対する劣等感」が大きな要因として存在していることが明らかになった。同時に、その劣等感が体育授業経験の中で増幅されている一面がうかがわれた。

潜在要因としての「運動能力の低位に対する劣等感」に対して、体育授業が増幅過程として機能

しているという現状を認識するならば、逆に、体育授業のあり方によっては、「運動ぎらい」を減少させることも可能であるという仮説も成立するはずである。それゆえ、劣等感・不安感を取り除くような学習場面づくりに配慮する必要性や、教師の指導理念、態度、評価の視点などについて、今後さらに多くの研究が必要とされているといえよう。

引用・参考文献

- 1) 阿部忍「感性の体育論」体育科教育, 24-4: 70-72, 1976.
- 2) 阿部忍, 「生涯体育の意義」, 体育原理研究会(編), 生涯体育論, 不昧堂, 1973. pp. 8-17.
- 3) 鮎戸弘, 社会調査入門, 日経新書, 1971. pp. 130-31 および pp. 148-55.
- 4) 鮎戸弘「数量化理論——社会行動研究における適用の効用と限界について——」年報社会心理学, 5: 73-103, 1964.
- 5) 荒井貞光・松田泰定「スポーツ行動に関する実証的研究(2)」体育学研究, 22-3: 137-52, 1977.
- 6) 荒井貞光・松田泰定・東川安雄「スポーツ行動に関する実証的研究(Ⅳ)——集団参加行動について——」日本体育学会第28回大会号, 1977. p. 225.
- 7) 浅田隆夫「運動嫌いを形成するもの——学習のつまずきとの関連で」体育科教育, 28-10: 12-15, 1980.
- 8) 調枝孝治「体育嫌いの原因の探究とその対策」学校体育, 31-11: 12-17, 1978.
- 9) 團琢磨「運動の楽しさを学ばせる授業の展開」体育科教育, 26-4: 14-16, 1978.
- 10) 江川致成「運動能力の劣等感とその克服」児童心理, 29-11: 126-31, 1975.
- 11) 江口篤壽・松浦義行・吉川和利, 「筑波大学学生の体育・スポーツに対する意識について」, 筑波大学体育センター大学体育研究会(編), 大学体育教本, 不昧堂, 1977. pp. 447-54.
- 12) 江刺正吾「統計的推論による社会事象の予測の問題——女子学生のスポーツに対する態度の予測を中心に——」日本体育学会第30回記念大会大会号, 1979. p. 124.
- 13) 福武直, 社会調査, 岩波全書, 1958. p. 50 および p. 229.
- 14) 布施善克・篠塚馨「学生生活とスポーツ活動に関する社会学的研究(医学, 歯学系大学の事例研究)」体育学研究, 13-5: 35, 1969.
- 15) 浜田靖一「『体育・スポーツ嫌い』を考える」新体育, 50-4: 8-13, 1980.
- 16) 花田敬一, 「パーソナリティ, 態度および適応」, 前川峯雄・猪飼道夫・笠井恵雄(編), 現代体育学研究法, 大修館書店, 1972. pp. 337-38.
- 17) 橋本公雄・徳永幹雄・松本寿吉, 「生涯体育の視点からみた大学体育のあり方に関する研究——身体運動に対する態度と行動について——」, 九州地区生涯体育研究会(編), 生涯体育の視点からみた大学体育のあり方に関する研究, 九州地区生涯体育研究会, 1980. pp. 71-92.
- 18) 橋本重治, 教育評価法概説, 改訂版, 金子書房, 1975. p. 100.
- 19) 服部豊示「本学学生のスポーツ参加理由について——外在的および内在的理由からのアプローチ——」明治薬科大学研究紀要(人文科学・社会科学), 9: 15-24, 1979.
- 20) 服部豊示・波多野義郎・秋葉尋子・猪狩洋一「高校生・大学生が評価する中学・高校の体育教師」東京体育学研究, 5: 48-53, 1978.
- 21) 堀田登, 「日本の生涯体育政策」, 体育原理研究会(編), 生涯体育論, 不昧堂, 1973. p. 269.
- 22) 池田勝「余暇行動の社会的および心理的決定要因の分析——最近の研究動向と今後の課題——」大阪体育大学紀要, 5: 1-13, 1973.
- 23) 井上和子・田中国夫「行動予測因としての態度およびその他の変数に関する研究(Ⅱ)」心理学研究, 46-1: 39-47, 1975.
- 24) 石橋保・佐久本稔「“運動ぎらい”に関する研究(第1報)——生徒と体育教師間の Dis Communication について——」福岡教育大学紀要第5分冊, 21: 61-66, 1971.
- 25) 石橋保・佐久本稔「“運動ぎらい”に関する研究(第2報)——運動ぎらいを規定する年齢別要因について——」福岡教育大学紀要第5分冊, 23: 27-36, 1973.
- 26) 嘉戸脩, 「社会人の生活程度, ひま, 運動経験の3条件の組み合わせによる運動・スポーツ実施状況の分析」, 日本体育協会スポーツ科学委員会(編), 社会体育に関する研究——社会人の運動・スポーツについての動機及び健康・体力に関する3ケ年の研究から——, 日本体育協会, 1976. pp. 9-19.
- 27) 嘉戸脩「生涯スポーツから到達基準を検討する」学

- 校体育, 31—4 : 30—36, 1978.
- 28) 嘉戸脩「スポーツ活動の多元クロス分析の試み」東京学芸大学紀要5部門, 28 : 214—23, 1976.
- 29) 嘉戸脩「体育科教育の諸問題『体育嫌い』の背景から」東京学芸大学紀要5部門, 23 : 227—40, 1971.
- 30) 嘉戸脩・永島惇正・川辺光・萩原美代子・加藤爽子, 「直接的スポーツ関与の分析とその要因に関する研究」, 体育社会学研究会(編), スポーツ参与の社会学, 道和書院, 1977. pp. 25—56.
- 31) 影山健, 「社会調査の技術」, 前川峯雄・猪飼道夫・笠井恵雄(編), 現代体育学研究法, 大修館書店, 1972. pp. 375—96.
- 32) 金崎良三・橋本公雄「学生の課外体育活動に関する研究(第1報)——その規定要因について——」九州大学体育学研究, 5—4 : 27—35, 1976.
- 33) 金崎良三・多々納秀雄・徳永幹雄・橋本公雄「スポーツ行動の予測因に関する研究(1)～社会学的要因について～」日本体育学会第31回大会号, 1980. p. 227.
- 34) Kenyon, G. S., “The use of path analysis in sport sociology with special reference to involvement socialization,” *International Review of Sport Sociology*, 5 : 191—203, 1970.
- 35) 片岡徳雄・荒井貞光・加野芳正「体育の子ども大衆文化論的研究(一)」学校体育, 32—7 : 139—45, 1979.
- 36) 小林篤「運動ぎらいにさせるものは何か——その社会的条件——」体育の科学, 20—5 : 289—93, 1970.
- 37) 小椋博・影山健「労働要因がスポーツ参与に及ぼす影響の分析——重回帰モデルによる計量的研究——」体育学研究, 22—5 : 311—19, 1978.
- 38) 糸野豊・池田勝・山口泰雄「パス解析によるスポーツ参与の分析」筑波大学体育科学系紀要, 2 : 23—30, 1979.
- 39) 栗本関夫・吉儀宏「外向性及び内向性者の運動学習に及ぼす“けなし”と“おだて”の効果」体育学研究, 12—5 : 257, 1968.
- 40) 前川峯雄, 「学校の体育」, 体育原理研究会(編), 生涯体育論, 不昧堂, 1973. p. 152.
- 41) 松田岩男, 体育心理学, 大修館書店, 1979. p. 327.
- 42) 松田岩男「運動不適応児の指導」学校体育, 15—5 : 15—19, 38, 1962.
- 43) 松田泰定・東川安雄・荒井貞光「スポーツ行動に関する実証的研究(3)——スポーツ種目選択行動について——」体育学研究, 24—1 : 1—11, 1979.
- 44) 松本寿吉・徳永幹雄・吉川和利・峯重新二郎・橋本公雄「生涯体育の視点からみたスポーツに対する態度と行動に関する研究」日本体育学会第30回記念大会大会号, 1979: p. 178.
- 45) 松浦義行, 体育学研究法, 逍遙書院, 1960. p. 135.
- 46) 見田宗介, 「現代における不幸の諸類型」, 北川隆吉(編), 疎外の社会学, 現代社会学講座(6), 有斐閣, 1963. pp. 21—72.
- 47) 宮本美沙子「達成動機(2)」児童心理, 30—2 : 175—95, 1976.
- 48) 文部省, 中学校指導書保健体育編, 東山書房, 1978. pp. 11—13.
- 49) 文部省, 高等学校学習指導要領解説, 保健体育編, 一橋出版, 1979. p. 10.
- 50) 文部省体育局スポーツ課「スポーツは実行の時代——体力・スポーツに関する世論調査から——」健康と体力, 12—2 : 14—17, 1980.
- 51) 文部省・経済企画庁等関係6省庁, コミュニティスポーツ施設整備計画調査報告書——住民意識調査, 日本システム開発研究所, 1974. pp. 26—31.
- 52) 長沢邦子「女子短大生にみられるスポーツへの意識について」日本体育学会第26回大会号, 1975. p. 160.
- 53) 長沢邦子・丹羽劭昭「過去の運動部経験がスポーツや体育への意識におよぼす影響」日本体育学会第27回大会号, 1976. p. 129.
- 54) 永吉宏英・江橋慎四郎・糸野豊・島崎仁「スポーツ活動成立要因に関する研究——林の数量化理論第Ⅱ類を用いて——」日本体育学会第25回大会号, 1974. p. 187.
- 55) 中雄勇・柏原健三「身体活動における評価の問題(第1報)」大阪教育大学紀要第Ⅳ部門, 18 : 57—66, 1969.
- 56) 仲田千恵子・頭川徹治・横山泰行「運動ぎらいの子どもたちの特徴は何か」新体育, 48—2 : 74—75, 1978.
- 57) 中島豊雄「学校体育と社会体育の接点に関する研究 1. 大学における体育およびスポーツ活動と卒業後のスポーツ行動との関係——名古屋大学卒業生の場合——」名古屋大学教養部紀要, 15 : 61—85, 1971.
- 58) 中島豊雄「卒業後のスポーツ行動と学校体育」学校体育, 33—1 : 138—41, 1980.
- 59) 中島豊雄・寺沢猛・西垣完彦「学校体育と社会体育の接点に関する社会学的研究——大学卒業後のスポーツ行動と大学の体育・スポーツとの関連について——」体育学研究, 14—5 : 54, 1970.
- 60) 日本体育協会スポーツ科学委員会, 社会体育の動機に関する調査——第2報・面接調査——, 昭和48年度日本体育協会スポーツ科学研究報告, 1974. p. 9.

- 61) 丹羽劭昭「運動ぎらいや運動への無関心層をいかにして引きつけるか」体育の科学, 20-5: 294-97, 1970.
- 62) 丹羽劭昭・村松洋子「女子大生のスポーツ参加の動機に関する因子分析的研究」体育学研究, 24-1: 25-38, 1979.
- 63) 丹羽劭昭・長沢邦子「女子大生のスポーツ参加を規定する要因の検討」体育学研究, 23-2: 109-19, 1978.
- 64) 野口義之「中・高等学校生徒の体育の授業に対する態度—第1報—中学校生徒について」京都教育大学教育研究所所報, 20: 150-62, 1974.
- 65) 野口義之・浜田清「中・高等学校生徒の体育の授業に対する態度—第2報—主として高等学校生徒について」京都教育大学教育研究所所報, 21: 125-33, 1975.
- 66) 佐久本稔「発達段階と運動欲求」体育科教育, 22-4: 24-28, 1974.
- 67) 佐久本稔「身体運動に対する興味を採る——“運動ぎらい”の要因・寄与率と行動傾性からの考察——」日本体育学会第27回大会号, 1976. p. 592.
- 68) 佐久本稔「運動ぎらいにさせるものはなにか——その正体と交路を求めて——」体育の科学, 20-5: 283-88, 1970.
- 69) 佐久本稔「運動群別にみた好き嫌いの現状」学校体育, 31-11: 31-37, 1978.
- 70) 佐久本稔「運動の好きな子, 嫌いな子」学校体育, 29-6: 31-38, 1976.
- 71) 佐久本稔・篠崎俊子「学校体育期の“運動嫌い”に関する研究(Ⅰ)」生活科学, 12-1: 55-78, 1979.
- 72) 佐久本稔・篠崎俊子・石橋保「“運動ぎらい”に関する研究第3報」体育学研究, 15-5: 69, 1971.
- 73) 島崎仁「増大する日本人のスポーツ愛好度」健康と体力, 8-13: 58-61, 1976.
- 74) 白木靖博「中・高校生の運動に対する意識調査(体育授業に対する意欲と認識度について)」神奈川県立体育センターレポート, 2: 1-17, 1975.
- 75) Spreitzer, E. and Snyder, E., “Socialization into sport: an exploratory path analysis,” Research Quarterly, 47-2: 238-45, 1976.
- 76) 末利博「運動の下手な子の原因の探究とその対策」学校体育, 31-11: 18-24, 1978.
- 77) 鈴木清「体育指導におけるケース・スタディ」学校体育, 16-10: 8-11, 1963.
- 78) 鈴木清「運動嫌いの子どもの背景」体育科教育, 22-4: 6-8, 1974.
- 79) 高田典衛, 体育授業の改造, 杏林新書, 1979. pp. 23-26.
- 80) 高木修「社会的行動に及ぼす態度の効果」関西大学社会学部紀要, 創立九十周年記念特輯: 243-67, 1975.
- 81) 高森秀蔵, 「体育授業場面での不安情況の解析」, 大学体育研究第2号, 筑波大学体育センター, 1980. pp. 72-82.
- 82) 高森秀蔵・青井水月・坂田勇夫・本間崇・山下和彦・宮地力「体育授業における不安情況の解析」日本体育学会第30回記念大会大会号, 1979. p. 647.
- 83) 高森秀蔵・大石三四郎・松浦義行「過去の体育実践と体育に対する態度との関連」日本体育学会第27回大会号, 1976. p. 347.
- 84) 竹之下休蔵「新しい社会と学校体育の転換」学校体育, 32-2: 14-21, 1979.
- 85) 竹之下休蔵「運動の生活化と生涯スポーツの観点から」体育科教育, 25-8: 26-28, 1977.
- 86) 多々納秀雄・厨義弘「スポーツ参加の多変量解析(Ⅰ)——数量化理論第Ⅱ類による要因分析——」健康科学, 2: 103-18, 1980.
- 87) 徳永幹雄「中学・高校・大学生の運動に対する態度と行動」教育心理, 27-11: 65-71, 1979.
- 88) 徳永幹雄・橋本公雄・坂井純子「身体運動に対する態度の構造と運動の関係についての研究」九州大学体育学研究, 5-4: 9-20, 1976.
- 89) 徳永幹雄・橋本公雄・多々納秀雄・金崎良三「スポーツ行動の予測因子としての行動意図・態度・信念に関する研究(Ⅱ)——ランニング実施者と非実施者の諸属性の比較——」健康科学, 2: 91-101, 1980.
- 90) 富本佳郎「人物評価としての面接法」教育心理, 25-12: 6-11, 1977.
- 91) 宇土正彦「国民スポーツの普及・振興と学校体育の役割」体育科教育, 24-13: 30-32, 1976.
- 92) 宇土正彦「生涯スポーツからみた体育指導と評価」学校体育, 31-4: 16-22, 1978.
- 93) 梅田靖次郎・近藤衛・佐々木吉正・久永義裕・金崎良三・石堂みゆき・吉川和利「生涯体育の視点からみたスポーツへの社会化に関する研究」日本体育学会第30回記念大会大会号, 1979. p. 158.
- 94) 柳井晴夫・岩坪秀一, 複雑さに挑む科学 多変量解析入門, 講談社ブルーバックス, 1976. pp. 294-95.
- 95) 安田三郎・海野道郎, 社会統計学, 改訂2版, 丸善, 1977. pp. 225-26 および p. 247.
- 96) 横田澄司「自己概念におよぼす Significant Other の影響力について(Ⅰ)——特に承認と否認の効果について——」年報社会心理学, 6: 125-45, 1965.